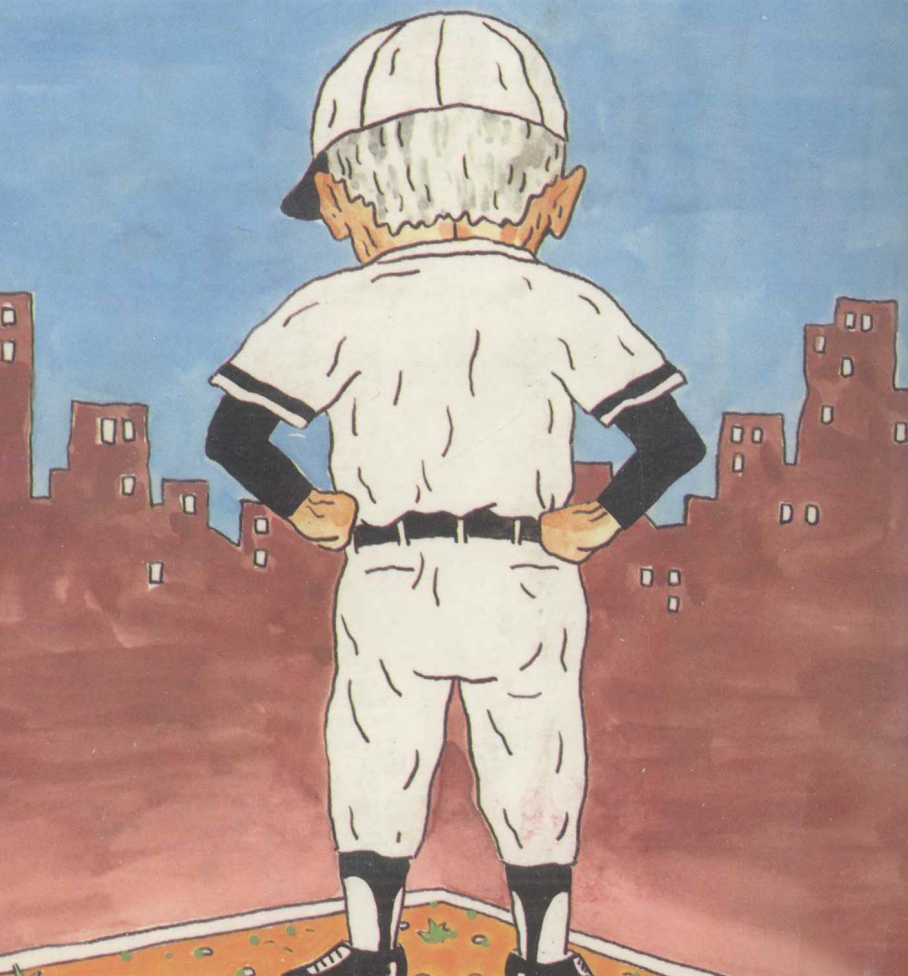


球は転々宇宙間

赤瀬川 隼



球は転々宇宙間

赤瀬川 隼

赤瀬川 隼（あかせがわ しゅん）

本名・赤瀬川^{はせがわ}隼彦。1931年，三重県四日市市に生まれる。10歳までに，名古屋，横浜，芦屋，門司，大分と転々。大分第一高校卒業。住友銀行，テック（言語教育）等を経て，現在，個人編集文筆業。横浜市在住。
著書『映画館を出ると焼跡だった』（草思社）

球は転々宇宙間

昭和五十七年七月二十五日 第一刷
昭和五十七年八月二十五日 第二刷

定価 九八〇円

著 者 赤瀬川 隼

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三十二三

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合は

お取替えいたします

球は転々宇宙間／目次

鏡のくにの野球 5

帰ってきた知識人 23

異相の怪童よ、輩出せよ 46

七十八歳の外野席ファン 73

球は転々宇宙間 94

見えないナイン 116

季節風、東京に舞う 142

おらがくにの野球 171

ドリンカーズの苦戦 210

葵
了
赤瀬川
原平

球は転々宇宙間

鏡のくにの野球

一九八八年、戦後四十四年二月二十三日の昼下がり、広島市民球場の大会計は二時を指している。広島ドラゴンズの監督、志村千三は、コーチや選手がグラウンドに出払って人気のないベンチに腰を降ろし、腕組みして選手たちの動きを眺めている。二基のバッティング・ケージからは、バットが球を弾き返す音、キャッチャーのミットの音、それにときどき小さく短く挙がるかけ声や溜息などが、志村の耳にきれぎれに聞こえてくる。ケージのうしろでは、バッティング・コーチの山本浩二が練習を見守っている。志村は、ときどき腕組みをほどこいて足元の炭火に両手をかざす。そのときは、首から上はグラウンドに向けたまま腰を前に屈めるので両肩が上がって背が少し丸くなり、急に老けて見える。

不本意だが、のっけからことばの解説をしなければなら

ない。ほんの一部の読者のためにはあるが。

一行目に「戦後四十四年」とあるのを、太平洋戦争のときですでにこの世に生を享けていて、何らかの忘れ難い経験を持っている人間の、思い入れの強い表現のたぐいと読まれては、筆者は大変困るし、はずかしいのである。「戦後」が、かつての明治、大正、昭和と同じく、今の日本のれっきとした年号であることぐらい、今の日本人なら誰でも知っているので注釈の必要などないと思っていたのだが、最近になってそう安心してばかりもいられないことがわかった。そこで、大多数の読者には申し訳ないが、せっかく楽しい野球の話に行こうとしている矢先に、しばし中断せざるを得ない。

というのは次のようなわけなのだ。この年号が制定された一九八三年、すなわち今から五年前だが、それよりさらに少し前の一九八〇年前後から、日本をひそかに去ってどこともなく姿を消す人が増え始めたという。それも会社の仕事とか、学術研究とか、その他目的のはっきりした移住ならどうということはないが、目的も原因もはっきりせず、半ば蒸発するように消えて行く人が増え始めたそうだ。それだけに実態は掴みにくいのだが、各界の中堅エリートあるいはインテリといわれる人びとのうちで、比較的中道と見られていた層にその傾向が強かったそうだ。その人たちは一様に、「アイデンティティの恢復」とか「失われた時

を求めて」とか小声で口走りながらどこかに消えて行ったとのことだ。何でも行先は、インド、中国奥地、アフリカなどが多かったという。

中道インテリといえば、そのころの日本はどちらかというと、政治、社会状況、芸術、思想など全体におおむね保守中道寄りであったと思う。だから、中道インテリにとっては仕事もやりやすく、考えも述べやすく、暮しやすかったのではなからうかと筆者などには思えるのだが、そう単純には行かない面もあったようだ。筆者とちがって頭の冴えた人ほど、そして社会の中核にいる人ほど、そういう中道思潮の中ではアイデンティティとやらを失いがちだったとも想像できないことはない。

それはともかく、そういう人たちは、自分がせつかく隠れた土地に、まともな仕事や研究で行った日本人が現われると素早く身を隠し、どこかでただ何となく棲息していたようだ。そういう中道インテリの大半は、日本を出るまでに中流程度の貯えは作っていて、海外での隠遁生活でもその金を肌身離さず持っていたらしいから、まかりまちがえば食いっぱぐれて餓死するかも知れないというような緊迫感はなかったようだ。私の友人の説によれば、各界の第一線で激務を負うエリート層に、かえって、情報過多によるノイローゼや文明回避、文明嫌悪症とでもいうものが発生しやすく、その中で誠実で繊細なタイプの人ほど自己嫌悪

につながるのだそう。工業文明が破綻して行く深淵をかいま見て身がすくむのだそう。そしてそれに対して行動を起こさずに逃避する。それが、情報や工業文明の及びにくい土地への文明回避旅行になったという。筆者などの頭では、結局それは特権階級の精神的避暑、避寒旅行ぐらいにしか理解できず、われわれには関係のない、まあ結構な話だと思っていた。

ところが、ごく最近になって、そういう人たちが七、八年ぶりに、ひそかに大勢日本に帰って来始めたというのである。情報の及びにくい場所に、日本も暮しやすくなったとでもいう情報が伝わったのだろうか。それとも、アイデンティティとか失われた時とかいうものを、精進の甲斐あって首尾よく所期の目標どおり恢復したのだろうか。どうもこういうものは、恢復するときはみんな一斉に恢復するもののようなから、案外そうかも知れない。そして、出て行った数も帰ってきた数もはっきりわからないが、最近になって「戦後」ということばが年号であることや、その由来を知らない人がちらほら目立つようになったそう。しかしその数は日本国民の中ではたかが知れたものだろう。ましてこの本の読者の中にはほとんどいないのではなからうか。ただ念のために筆者は文藝春秋の編集部に相談してみた。すると編集部は予測では、これら里帰り中道インテリの人たちのうち無視できない数、おそらく大半の人がこ

の本を読むであろうというのである。「だから、常識程度のことは簡単に説明しておいたほうがいいでしょう」と言う。そういうわけで、この間ひたすら日本で土を耕し、物を作り、物を売りながら、この七、八年の日本の推移を見、見るだけでなく、工業と農林漁業の調和、エネルギー問題の克服、自然環境の回復、教育の正常化をはじめ、暮ししやすい日本の建設にさまざまな役割を分かち合ってきた読者には、わかりきったことなので申し訳ないが、どうか常識程度のおさらいと思つてほんのもう少しおつきあいいただきたい。野球のことを書き始めたのに、のっけからとんだ役割を負ってしまったものだ。

一九八〇年前後に、年号あるいは元号法制化をめぐる論議が日本の国会で盛んになったことがある。つまり、天皇の崩御や即位のたびに年号が変わつて〇〇元年になるという、中国や韓国でもとうの昔にすたれていて世界中で日本ぐらいにしか残っていない風習を、今後どうするかについての論議であった。しかし「今後」とは、現在の天皇の崩御を前提にしなければ成り立たない性質のものであったから、このテーマは心おきなく侃侃諤諤というぐあいにも發展せず、いつのまにか下火になっていた。ところが一九八二年の暮れに、保守堅持党（それまでの自由民主党を中心とする保守系合同政党）の皆川肇と、近未来革命党（そ

れまでの日本社会党を中心とする革新系合同政党）の宗太郎の二人を中心に、「天皇の崩御、即位に関係なく、来年から日本の年号を『戦後』と改めよう。すなわち、一九八三年は戦後三十九年である」という提案がなされた。要旨は次のようなものであった。

「戦後は終わった」という論議は終わったか否か吾人は関知しない。吾人はただ、「戦争の世紀を終わらしむべし」という意味をこめてこの提案をなす。すなわち、近い将来にまた全面戦争が起きて、また「戦後元年」が到来するようでは、吾人の提案は一切の意味を失うのである。「戦後」とは唯一固有の「センゴ」であつて、一九四五年、すなわち従来の年号による昭和二十年こそ、唯一固有の戦後元年である。したがつて「戦後」を唯一固有の年号とすることは、永世平和への希求と誓いの表現にほかならない。吾人はこれを日本のみにとどめず、第二次世界大戦にかかわつたすべての国が西暦紀元と併用することを望むものである。すなわち、ボストウオー、アブレゲール等々。

ただし、当のわが国には一つ問題が残る。それは戦後百年、西暦二〇四四年になると、日本では「センゴヒャクネン」と発音することとなり、「千五百年」とまぎらわしくなるということである。しかし、そういう問題を

かかえながらも、戦後九十九年まで、つまりまだ六十年はこれでもつ。そのあとのことは、そのときに生きている人たちに考えてもらえばよいではないか。

で、詳しい経緯は省くが「よからう。六十年ほどこれで行ってみようじゃないか」という、当時としては珍しく波長の長いテーマが可決されたのだった。かくして一九八三年に日本の年号は「戦後」と改められた。そして新年号制定とともに、「戦後は終わった」をめぐる論議も自然に消滅した。

それ以前にも、毎年八月十五日が近づくと、新聞やテレビは忌まわしき戦争を回顧する記事や番組を一斉に特集していた。万感胸を打つルボルタージュもあれば、戦争の美学を讃えていると取られかねない映画やテレビ・ドラマもあった。靖国神社への閣僚の参拝が毎年問題になった。そして八月十五日が過ぎると、渡り鳥が群れをなして飛び立つように、それらの話題は一斉に姿を消した。幸か不幸か、毎年八月十五日は甲子園の全国高校野球たけなわの時期にあたる。正直な話、地元の学校がその日に試合に出る地方では、終戦記念日の朝から野球のことに身も心も奪われ、わが地元チームの戦いすんで日が暮れて「あ、今日は終戦記念日だった」とわれに帰る人も少なくなかった。いや少なかったというべきか。というのは、すでにわれに帰るに

も帰るべきゆえんを知らない人のほうが多かったのである。しかし、年号が戦後となればどうだろうか。お役所でも会社でも、履歴書にも借用証書にも、毎日全国津々浦々で「戦後」「戦後」と書かれて確認されることになる。そこで提案者は言う。「だから年一回のおぎなりではなく、毎日が戦後で毎日が非戦の誓いなのだ」と。しかし、いくら「ことだまのさきおうくに」でも、そこまでの効能はないようだ。

しばらくすると、中・高年といわれる世代の人が自分の旺盛な余力をもてあまして再就職する際の履歴書に、次のような記入が目立つようになった。「生年月日、終戦前（敗戦前と書く人も多い）十九年十二月二十六日」、すなわち昔でいえば昭和元年である。「終戦前二十五年」、昔でいえば大正九年だ。こういうふうには、一九四五年、昭和二十年、戦後元年が、ちょうど西暦紀元と紀元前の分岐点と同じように扱われるようになったのであった。

さて、いつまでもこんな話にかかずらっているのは、野球ファンの読者に申し訳ない。大急ぎで戦後四十四年二月二十三日の広島市民球場に戻ろう。

人気のないベンチで、監督の志村千三ただ一人が腰かけていて、グラウンドの選手たちの練習を眺めていたのだっ

た。

志村の眼は、近くのダイヤモンドの中よりも、遠い外野で動いている選手たちに注がれているようだ。その中でも特に、一番遠くのセンターの塀際で球を追っている、一人のとびきり小柄な左利きの選手に注目しているように見える。

たしかに志村の眼は、その帆足航平の動きにつれて動いているように見えるが、それは外見だけで、彼の意識は眼前の野球から遊離して空となっていた。スプリング・キャンプの一日の中で、志村はたいてい一度はこういう状態になる。放心に近い。そのまま放っておいても短時間で自然にわれに帰ることもあるし、自分で戻ろうと思ってもなかなか戻れず、コーチや選手に何か声をかけられてはじめて気を取り戻すこともある。そうかといってそのときの志村は、何かはつきりした考えにとりつかれているわけでもない。何か不定形のものが、考えるということの一步手前の、ぼんやりとして結像しない風景となって眼球の奥を浮遊しているのである。風の弱い晴天の昼下がりにこういう状態になることが多い。実を言うと、スプリング・キャンプだけでなく、ベナント・レースの緊迫したゲームの真っ最中にもこういうことがあるのだ。

広島は、真冬でもそれほど暗く重苦しい天気には見舞われない。そして今、山陽路にはすでに早春の光が満ち、と

りわけ今日は、あるかなきかの風が肌に心地よく、不気味に思えるほどすがすがしい。志村が放心に近い状態になる条件は揃っている。しかしさすがに志村は、そういうときでも眼を閉じるということはない。いつどこから球が飛んでくるかわからないからだ。それにしても一体、この監督はまじめに仕事をやっているといえるのだろうか。そういう声が聞こえてもしたかのように、志村は炭火から手を遠ざけ、やがてベンチを出てバッティング・ケージのほうにゆっくりと歩いて行った。

志村は、バッティングのことはバッティング・コーチの山本浩二にほとんど任せっきりである。山本は、つい一昨年まではドリンカーズの中心打者であるだけでなく、全国三リーグ十八球団の中でも代表的なスラッガーだった。彼の体には、まだまだ実戦の熱い電流が脈々と流れている。彼は分析的なことばや身振りでくどくどと選手に教えたりはしない。短い一言が選手に通じる。その一言も注意や指示というより、ちょっとした示唆である。それが通じてないなと思ったときは、山本自身が打席に立って実例を示す。選手たちは、その山本の体の電流を読み取る。そしてそれを自分なりに生かす。ドリンカーズの基本は、練習でも試合でも、この山本のやり方に現われている。志村のやり方も、ヘッド・コーチの島村玄太や他のコーチのやり方も同じだ。手とり足とりといったことはあまりない。

二基のケージに入って球を打っている二人の選手は、それでも、監督が珍しくすぐうしろに来て自分たちを見始めたという緊張した気分を、尻から背骨を通して肩にかけてみなぎらせているようである。

「トシ坊、肩の力をもう半分尻に移すんだな」

と志村は言った。山本コーチが志村を見てにやりと笑った。

トシ坊といっても、もう二十七歳でチームの中心選手の一人だ。永田利則、一九八〇年、戦後三十六年に広島商業からカーブに入り、それから四年目の全国球団再編成によってドリンカーズの一員となった。そのとき東京に帰った高橋慶彦のあとを襲ってショートに定着し、俊足好打のスイッチ・ヒッターとして成長してきた。打順はトップか二番を続けている。

志村も現役時代それほど好くない打者ではなかった。十一年間の平均打率二割六分六厘はまずまずである。しかし、志村は打者としてよりも二塁手としてのプレーのほうに印象に残る選手だった。永田に「肩の力を尻に移せ」とは言ったものの、志村は打撃についてあらたまった意見を言いにバッティング・ケージに寄ってきたわけではない。志村は、さっきまで守備の陣形についてあるイメージを思い描いていて、その連想につられて何となく永田のスイッチ・ヒッターぶりを見にきたのだ。その守備陣形とは、強いて

いえば「スイッチ守備」とでもいおうか。

（こんなこと、鳥村コーチに話したら、トリさん、また心配するだろうな）

と志村は思いながら、独りでにやりとした。

投手の場合は、試合中に状況次第で右投げと左投げが交替することがある。これは二人がかりのスイッチ・ピッチングといえよう。そしてそれなりの理由がある。しかし、投手以外の守備のポジションで試合中にそんなことをする必要がどこにある。第一、内野手でいえば、守備の場合にも左利きという選手が守れるのは一塁ぐらいのものではないか。志村監督は一体何を考えたのだろうか。

（何でおれはこんなことを）

と、志村自身も思っただけ考えを中断した。そしてバッティング・ケージの脇を離れて、ふたたびベンチに向かった。どうもこの監督、あまりやることがないようだ。

案の定、志村の意識はまたさっきと同じように眼前の野球から離れて、空の状態におちいって行った。つまりこの監督、さっき気まぐれに永田に「肩の力を尻に移せ」と言った以外は、ぶらぶらしながらつかまえておかない考えにふけったり、ベンチで炭火に手をかざしているだけである。監督がこれでいて、一体今年の広島ドリンカーズはちゃんとやって行けるのだろうか。オーナーが見たら、いや、今日ではすでに個人のオーナーは存在しないクラブ組織で、

広島ドリンカーズ運営協議会の市民代表というのが恐い存在なのだが、彼らが志村の様子を見たら何と思うだろう。現にスタンドでは、熱心なファンが大勢グラウンドを見守っているではないか。

最近では、ドリンカーズは二月下旬に入ると日南のキャンプ地から引き揚げて本拠地に戻ってくる。全国でも、札幌アース、仙台ガンディーズ、長野アルプスの三球団以外はたいてい同じだ。そして、この寒冷地の三球団だけはスプリング・キャンプの全期間をそれぞれの本拠地球場で過ごす。今のところこの三球場にかぎり、開閉ドーム付温度調節全天候型球場の設備がコミッショナーから許可されているからだ。

全国三リーグ十八球団は、いずれも市民代表を含むそれぞれの運営協議会によって運営されており、キャンプについても冗費を省き、本拠地でできることは本拠地という方針である。もっとも、大口の金を出すのは地元企業や富裕な個人であって、協議会は「金は出せないが口は出す」という存在である。しかし「早くキャンプ地を引き揚げてこい」というのは、予算のこともあるが、協議会は、「地元の大勢のファンが、一日でも多く選手の練習を見たがっている。この熱意に応えてやってほしい」という点を強調している。だから今も、スタンドには大勢の熱心なファン、あるいは、死ぬほど退屈な暇を処理するにはこれが

一番だという人びとが詰めかけているのだ。

志村の放心は続く。

(吹田^{すいた}さんがおしのびで突然うちに見えたときは、曉子のやつ緊張してたなあ。吹田さんのウイスキー・グラスに氷を入れたときの曉子の手つきを思い出すよ。千五は中学生になっていたっけ。おれゆずりの素早い横眼で吹田さんを観察していたな。あれからもう七年が過ぎたか)

ことばにすればこうなるのだが、これは志村の頭の中では言語とか映像とかのはっきりした形はとっていない。走馬灯の残影を追っているような、あるいはテレビの走査線の何束かを意味もなく見つめているような状態である。

それにしても志村監督は、ただぼんやりしているだけにとどまらず、給料を貰っている大事な仕事場で自分の奥さんや息子のことを思い出しているとは、ますますけしからんではないか。一体その、おしのびの吹田さんとは何者か。吹田さんとは、一九八〇年の四月から三年の任期をほぼいっぱい、日本プロフェッショナル野球組織のコミッショナーとして働いた吹田^{ふいた}晨平^{あさひら}氏のことである。一九八三年二月末、任期満了直前に急逝した。急逝といっても八十一歳、天寿を全うしたともいえるようか。

志村千三の息子の千五が、親譲りの素早い横眼を使うのは、親子揃っていつも眼つきが悪いということではない。

志村は、広島ドリンカーズの監督の前は、広島カープ時代から引き続いていたのコーチ、そしてその前は、すでに紹介したように二塁手だった。二塁手は、試合中のナインの中の情報センターのようなものである。両チームのベンチ、コーチス・ボックスにいる相手のコーチ、味方のバッテリーなどから発せられるサインが、ショートとともに一番よく見える立場にいる。だから、そういうサインや打者や走者の動きから種々の情報を読み取って、それを一瞬のうちにさりげなく味方に伝える役目を負う。味方が攻撃中で自分がベンチにいるときは、相手の二塁手の動きを見て、同じ立場の人間としての像を読み取る。名手といわれる二塁手ほど、そのいずれの場合にも顔を動かさない。素早い横眼で一瞬のうちにサインや状況を読んで、それをさりげなく味方に伝えるのである。アフリカの草原で、敵を前にした猛獣が仲間を送る、怜悯にして細微な身体信号、とまでは行かないが、人類の中では格段高い域にまで達している。

志村も、かつては名二塁手とうたわれた一人だ。その素早い横眼がどうして息子の千五に伝わっているのか、志村にはふしぎで仕方がない。グラウンドではそういう仕事を志村も、家に帰ってまでそんな素ぶりに及んだ覚えはない。また、千五は父親の現役時代にも何度かゲームを見に来てはいるが、スタンドから遠く離れた志村の一瞬の横眼が千五にわかったとは思えない。第一、スタンドにいる

小僧から精緻をつくした横眼を見破られるようでは名手とはいえない。

(ところで、吹田さんの死は本当に病死だったのだろうか。五年も前のことに素人が推理を働かせても仕方ないが、どうもあれはおかしい。われわれの計画は、彼の死が少しでも早まっていたら、さぞ大きな困難にぶつかっていただろう。まるで、見えない敵の手がほんの少し遅かったためにわれわれのもくろみが成功してから遅まきながら死に追いやられたとしか思えないタイミングだった)

吹田コミッショナーが、日本のプロ野球の本拠地の全国規模の分散と、それに伴う諸機構や制度の改革を電撃的に提案したのは、一九八二年十一月十一日、日本シリーズが終わって間もないころだった。そして年内に十八都市が決定し、年が明けてその改革案が実行に移され、新しい体制が不動のものになった二月下旬、吹田は突然原因不明の病にかかって重態におちいった。それが五日ほどで奇蹟的に直って三日経つと、今度はさしたる症状も見せずに平静のまま、自宅の畳の上で絵筆を持った姿で忽然として逝ってしまったのである。

(高齢とはいえ、何一つ持病のない元気な人だったのに、どうもおかしい。おれはお通夜に千五を連れて行き、吹田さんの銀髪を櫛でとかかせてもらった。千代夫人がおれの手元をじっと見つめていた……)

「かんとく」

鳥村ヘッド・コーチの声で、志村はようやくわれに帰り、眼前の野球に目を戻した。鳥村は志村と並んでグラウンドを眺める恰好で、ベンチに腰を降ろした。

「航平はやっぱりセンターのトップで行きましようよ。トシ坊は二番がいいでしょう」

「うーむ」

と言ったきり、志村は黙って遠くを見ている。鳥村は志村の反応が鈍いので話を継ぐ。

「あいつは、昔の阪急の福本以来の逸材ですよ。チビさかげんも走りっぷりも福本そっくりになってきましたわ。もつとも、極端に早打ちの癖は、今までの基準ではトップ・バッターにふさわしくないかも知れませんがね」

「いや、早打ちのトップ・バッター、大いに結構じゃないか」

「守備も左のセンターというと、福本よりもっと昔の、中日の本多とか中あたりですね。彼らもトップを打ってたでしょ」

「うーむ」

志村は、しばらく何か言いたそうに口をモグモグやってしたが、やがて、その口の中のくすぐったさに我慢できないといった感じで口を開いた。

「トリさんよ。ぼくの見るところでは、もつと昔、戦争をはさんで活躍した呉昌征ね。巨人、阪神、毎日と移った左投左打の人間機関車だ。ああそれから、同じところの中日の坪内ね。彼は右利きだったが、航平と同じように小柄な名選手。ああいう人たちの思い出させるよ、航平のやつは」

話はずいぶん昔にさかのぼって行くようだ。

「はあ、名前はもちろん聞いてますが。何しろ私らには伝説的な存在で……」

「あ、そうだったなあ。いや、ぼくもね、中学生のころに、彼らの野球人生としては晩年のプレーを見ただけなんだよ。それにしても、こんな大昔の人のことを、トリさんも知ってるつもりで話すとは、ぼくもいよいよ晩年にさしかかった証拠だなあ」

「いや、私ももう若くはありませんがね」

鳥村は、その呉や坪内の話を志村から聞いておきたいという気持にも駆られたが、それよりも本題の帆足航平の件に戻らなければと思って口を開こうとした直前に、志村に先を越されてしまった。かつての名二塁手のタイミングの読みが今も志村に残っているというべきか。

「呉という人はめつぱう肩が強かった。センター前のヒットをショートバウンドですくい上げて素早いモーションでバックホーム。ぼくたちは、次に起こるホームベース上のドラマを生唾を飲み込んで待ったものだ。セカンドからの

走者はたいいていアウトになったな」

「人間機関車というのは？」

鳥村はつい志村の調子につられて聞いてしまった。

「うん、それはね、まず丈夫で長持ち、台湾から出てきて巨人に入ったのがたしか昭和十二年。それから二十年、四十一か二まで、そんなに打率も落とさずにがんばってた。それとね、ベースランニングがガニマタだけど速いんだ。お世辞にもスマートとはいえないが、よくいえばダイナミックな盗塁。それに後半にぐんぐんスピードが加わる。これも蒸気機関車そっくりだったというわけだ」

志村は、グラウンドを眺める姿勢そのまま眼を細め、楽しそうに語り続ける。

「しかし、盗塁でいえば坪内のほうが上だったかな。たしか現役最後の年、三十七、八歳だったのに三十六盗塁を記録してる。センターの守備も抜群だったよ。呉とちがつて肩の弱いのが玉にキズだったが、それを勘のいい出足でカバーしてた。とにかく前へ突っ込んでくるんだ。地上すれすれのスライディング・キャッチ。一回転して素早い送球。絶品だったな。それにバッティングにも味があり、バントもうまい。恰好のトップ・バッターだった。たしかあの人、千本安打と千試合出場の日本球界第一号だよ」

（どうもこのままでは、おやじさんの回顧談は止まりそうにないな）、鳥村は少しいらいらしてきた。往年のセンタ

ー・トップ・バッター群像を二人で楽しむのも悪くはないが、ここは一刻も早く、今シーズンのわがドリンカーズのセンター・トップ・バッターに帆足航平を起用する話に持って行かねばならない。そもそも、スプリング・キャンプも仕上げの段階に入った真つただ中で、監督とヘッド・コーチが、こんな昔の野球談義にうつつを抜かしていいものだろうか。

「監督、で、航平をその呉二世、坪内二世にしましょうよ」

「うーむ」

その話になると志村はまた黙ってしまふ。

「もうすぐオープン戦に入るし、そろそろ決めておきましょう」

そのとき志村はやっと口を開いた。

「原則としてそれでいいだろう。しかしトリさん、航平の身のこなしは内野手にも向いてないかねえ」

「え？」

鳥村は意表をつかれてしばらくはことばが出ず、志村の視線に合わせて外野にいる航平を見守った。鳥村の顔には（この瀬戸際に、おやじさんは一体何を考え出したんだ）という、困惑ともいられだちとも不安ともつかぬ表情が現われた。

「内野って？ あの子ビにファーストでもやらせようって